

若き議会事務局職員に聞く 「議会是最良の職員研修の場」

——今年の四月から道庁へ出向になったそうですが、福島町の職員になって一三年のうち二〇〇九年から今年まで八年間は議会事務局ですね。どんな時間の流れでしたか。

最初の税務課、次の水産課のときは仕事を覚えるのに精いっぱいでした。議会事務局に異動した当初もその延長でした。しかし、それ以前からはじまっていた町議会の改革がこの年に議会基本条例を制定することで本格化したので、やるのがたくさんあって安穩とはしておれなくなりました。議会事務局は石堂事務局長、前田次長（現教育長）、臨時職員と私の四人体制で、私は主に議会の情報公開（議会HPにアップする情報の作成・更新、議会だよりの編集、会議録の校正・公開など）を担当しました。議会と事務局は、議会基本条例に書いてあることは全部実施する方針でしたから、忙しかったですが、たくさん経験を積ませてもらいました。

——二元代表制は長と議会の機関対抗とか機関競争といわれます。議会事務局に勤務してもいずれば行政に異動する職員として、意識に分裂とか矛盾はありませんでしたか。

そのような悩みはありませんでした。というよりは、どこに配属されても私は町政府の職員ですから、町民福祉のために仕事をする気持ちは同じ

です。ただ職務内容が違います。議会事務局は町長と機関競争をする議会がその役割を十分に発揮できるようにしっかり下支えするのが仕事です。

これは上司の背中を見て教わったことですが、ときには議員や議会と厳しいやり取りも必要になります。事務局が根拠を示してしっかり仕事をするために、普段から議会と町民や行政との関係、議員間の関係における論点・争点を整理したり、各地の先進的な事例などへの目配りが欠かせません。それがとてつもなく勉強になりました。

——すばらしい自治体職員論だと思つてうかがいました。そうした認識は町長部局の若い職員のみならずとも共有できますか。

私自身がそうであつたように、経験しないとわからないことが多いので、いきなりは難しいかもしれませんが、「議会」という特別な意識をもたないことが大事ではないでしょうか。改革された議会、力のある議会のある町政であれば、私たち職員は、どこにいてもそれを前提とした仕事をしなければなりませんから、それが当然視されていけば、行政対議会という心理的な溝があつたとしても、だんだん埋まっていくのではないのでしょうか。

——十代、二十代の若い職員に議会事務局の職員になることをすすめますか。
大いにすすめますね。職員数が少なくなつて

行政も大変ですが、議会が活性化すれば事務局職員も忙しくなります。しかしそこには得がたい喜びとか充足感があります。たとえば、議会は「討論の広場」といわれますが、それだけに町民のみなさんの思いをふくめて町政の問題点や課題が総合的に見える場なので、最良の職員研修の場ともいえます。

神原先生はいつも「議会がよい決定をしなければ行政はよい執行ができない」といわれますが、職員も「議会ですっかり力をつけなければ行政でもよい仕事ができない」と思います。これからそういう考えが広がればいいなと思つています。

——議会事務局八年のなかで、とくに強く印象に残っていることは。

総合計画の策定時に作業部会の副部長長として草案作成にかかりましたが、政策をチェックする議会目線が役立って政策を考える視野が広がつたこと、議会だよりを楽しみにしてくれる町民の方が増え少しずつ議会活動が理解されてきたと感じたこと、それに私を鍛えてくれた石堂一志元事務局長が急逝されたことは大変なショックでした。

——議会事務局を経験した職員が異動後も議会のあり方を考える研究会が、各地に立ち上がっています。すぐれた議会改革の現場を経験した澤田さんに期待がかかっています。

そうした大先輩のみなさんに声をかけていただけるのは光栄です。これからもつと、みなさんからたくさん教えを受けたと思つています。

——とてもよいお話をきかせていただいて、ありがとうございます。

（聞き手・神原勝）

ハさわだ もとき 前福島町議会事務局議事係長／

道総合政策部市町村課財政グループ主任